

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察：「魂主義という生き方」のすすめ

著者	中丸 寛信
雑誌名	甲南経営研究
巻	56
号	3
ページ	1-28
発行年	2015-12-15
URL	http://doi.org/10.14990/00002178

地球環境問題の 根本的解決に向けての一考察

——「魂主義という生き方」のすすめ——

中 丸 寛 信

I は じ め に

筆者は前稿において、地球環境問題の根本的な原因が、私たち1人ひとりの中に深く根づいている過剰な「快感原則」⁽²⁾にあるとみなし、「なぜ私たちは『快感原則』を生きることになるのか」⁽¹⁾について、心理学からのアプローチとトータルライフ (TL) 人間学からのアプローチ⁽³⁾を紹介しながら検討し

(1) 中丸寛信「地球環境問題の根本的原因についての一考察——快感原則を中心として」『甲南経営研究』第55巻第4号、2015年3月、25～50頁。

(2) 快感原則とは、「苦痛を避け、快を求めようとする傾向」(外林大作他編『心理学辞典』誠信書房、1981年、51頁)、あるいは「人が不快な状態を避けて本能的な欲望・衝動の即時的・直接的な満足を得ようとする傾向を持っていることである」(中島義明他編『心理学辞典』有斐閣、1999年、102頁)。またそれは、「より大きな快感を得られることを第1義とする原則。この原則に従うなら、より快適に、より楽に、より便利に、より安心できる方向へと突き進むことになる。20世紀の社会は、この原則に従う自我によって大きな流れがつけられてきた」(高橋佳子『ディスカバリー』三宝出版、1996年、47～48頁)。

(3) トータルライフ (TL) 人間学 (「魂の学」) は、高橋佳子氏が提唱する永遠の生命観に基づく人間学であり、現代社会の中で人間が見失ってしまった絆——人と人、人と自然、人と社会、自分と人生、心と体などを結び目に見えないつながり——を知り、その回復に努め、応えていく道を示す人間学である (高橋佳子『グラウンドチャレンジ』三宝出版、1998年、429頁参照)。

てきた。

心理学からのアプローチとして、まず A. H. マズローによれば、私たちが生理的欲求などの基本的欲求に対してほとんど無意識的であり、それに基づいて判断し行動することから快感原則を生きざるを得ないこと⁽⁴⁾、また岡本重雄氏によれば、「自己意識の根底にある自己中心の欲望群」が私たちをして快感原則を生きさせていること⁽⁵⁾、さらに青井和男氏によれば、私たちが聖なる高層や無意識の低層へと心を深化できていないために快感原則を生きざるを得ないことなどがあつた⁽⁶⁾。

TL 人間学からのアプローチでは、生まれてくることによって人生に流れ込んでくる三つの「ち」の束縛⁽⁷⁾。それ以上に、人間を拘束する人生の仕組み

(4) Maslow, A. H. (1954) *Motivation and Personality*, Harper & Row, pp. 80-106 (A. H. マズロー著、小口忠彦監訳『人間性の心理学』産業能率大学出版部、1971年、89～117頁)；Maslow, A. H. (1962) *Toward a Psychology of Being*, p. 46, D. Van Nostrand (A. H. マズロー著、上田吉一訳『完全なる人間』誠信書房、1964年、72～73頁)；Maslow, A. H. (1971) *The Farther Reaches of Human Nature*, Viking Press, p. 43 (同著、上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房、1973年、54頁) など参照。

(5) 岡本重雄『人間心理学』朝倉書店、1972年、159頁；同著『無我の心理学』朝倉書店、1976年、54、73～74頁など参照。

(6) 青井和男『小集団の社会学』東京大学出版会、1980年、203、207、208、273頁など参照。

(7) 三つの「ち」とは、高橋佳子氏によると、両親からの「血」の流れ、土地からの「地」の流れ、そして時代からの「知」の流れ——。私たちは誰もが、この三つの「ち」の流れを過去からの遺産として引き受けることから人生を始める。そして、光と闇の混在するその流れによって、人生は呪縛を受けることになる。

血（ち）：血筋——両親や家系から流れ込んでくる価値観や生き方。たとえば、両親のものの方・考え方、現実や事態の受けとめ方、人に対する関わり方や行動の仕方、こだわりや偏見など。

地（ち）：地域——国や土地・地域、業界・会社等から流れ込んでくる価値観や生き方。学校や会社、業界等を支配する暗黙のルールや価値観も同様。

知（ち）：知識——時代から流れ込んでくる価値観や情報。江戸時代と現代とでは、職業観や人生観に大きな隔りがあるように、戦前と戦後に生まれた違いによっても、倫理観や人生観などが異なる（高橋佳子『あなたが生まれてきた理由』三宝出版、2005年、116～127頁；同著『Calling 試練は呼びかける』三宝出版、2009年、98頁参照）。

としての「人生の鉄則」⁽⁸⁾。さらに、そのような人間の条件を包み込んでいる世界の条件としての「崩壊の定」「不随の定」⁽⁹⁾。これらのいずれもが、私たちに如何ともし難い不自由さを宿命として与えるものであった。それらは、極めて強い心の縛りとなるものである。A. H. マズローも、「自己知識や自己改善は、大多数の人々にとって非常にむずかしい。通常大いなる勇気と長期の苦闘が必要である。……誤ったオプティミズムは、早晩、幻滅と怒りと絶望に変わるものである」⁽¹⁰⁾とのべている。21世紀を環境の世紀として新しいエコ・エコノミー経済を構築するために精力的に執筆し行動しているL. R. ブラウンは「持続可能な未来への移行を加速するには、個人と既存の機構の両方の惰性を克服する必要がある。ある意味で、惰性はもっとも手ごわい敵である。個人として人々はしばしば変化に抵抗する。大組織に属していると、人々はなおさら強く抵抗する傾向がある」⁽¹¹⁾と個人と組織の転換の困難さを指摘している。

それゆえ、いまこそ私たちは、それらの心の縛りを超え、快感原則から新しい原理・原則を生きていくこと、そのためにこれまでの人間観・世界観から新しい人間観・世界観などが求められているといえよう。本論文では、それらの問題に加えて、1人ひとりが人間として深化・成長しながら、持続可能で調和された社会を築いていくというヴィジョンに向かって、どのような生き方が求められているかというテーマに少しでも迫っていきたい。

(8) 生命としての誕生後の「人生の鉄則」として不安の鉄則、依存の鉄則、幾百幾千の他人の鉄則、快苦の鉄則、無自覚の鉄則が指摘されている(高橋佳子『希望の原理』三宝出版、1997年、138～143頁参照)。

(9) 高橋佳子『グランドチャレンジ』220～224頁参照。

(10) Maslow, A. H. (1962) *Toward a Psychology of Being*, p. 166 (訳書、221頁)。

(11) Brown, L. R. (2001) *Eco-Economy*, W. W. Norton & Company, p. 275 (レスター・ブラウン著、福岡克也監訳『エコ・エコノミー』家の光協会、2002年、356頁参照)。

II 快感原則から新しい原理・原則へ

20世紀は経済成長を優先する価値観、「経済的豊かさ＝人間の幸せ」というとらえ方、考え方が強かった。それは、「もっと楽に」「もっと利益を上げて」「もっと豊かに」という快感原則を生きようとする人間の自我意識からきている。

また、人間の自我は、自分中心主義といえる性質を抱き、「自分のこと、目先のこと、自分の利害に関わることにしか興味がない。「快こそ幸せ」と取り組んできた結果の集積が、今日の地球環境問題となって現れている。

その自我を超えて生きる「自己実現ないしは自己完成の概念が多数のパーソナリティ学者の思考の焦点になっていることは確かである。たとえば、ユング、アドラー、ロジャース、ゴルトシュタイン、マズロー、ガードナーのような人たちによれば、人間の最高目標は、みずからの生得潜在能力に応じて、現実のわくのなかで、創造的でユニークな個人に仕上がることであり⁽¹²⁾といわれる」。そのための取り組みやメソッドについて数多くの提案がなされてきた⁽¹³⁾。また近年、スタンフォード大学の心理学者であるケリー・マクゴニ

(12) Herzberg, F. (1966) *Work and the Nature of Man*, World Publishing Company, p. 56 (F. ハーズバーグ著、北野利信訳『仕事と人間性』東洋経済新報社、1968年、65頁)。

(13) A. H. マズローや F. ハーズバーグの著作のほか、Schuller, R. H. (1967) *Move Ahead with Possibility Thinking*, Doubleday & Company Inc., New York (R. H. シュラー著、桑名一央、藤原一郎共訳『積極的な考え方で成功する』産業能率大学出版部、1977年)；Hill, N. (1972) *The Think and Grow Rich Action Pack*, Hawthorn Books Inc., New York (N. ヒル著、柳平彬監修、田中忍訳『成功哲学』産業能率大学出版部、1977年)；国分康孝『＜自己発見＞の心理学』講談社、1991年；衛藤信之『心時代の夜明け』PHP 研究所、1998年；井上和臣『心のつぶやきがあなたを変える』星和書店、1997年；野口嘉則『幸せ成功力を日増しに高める EQ ノート』日本実業出版社、2006年；同著『鏡の法則』綜合法令出版、2006年；内山喜久雄『EQ、その潜在力の伸ばし方』講談社、1997年など数多くある。ここで、EQ とは emotional intelligence (情動知能) であり、IQ (Intelligence Quotient: 知能指数) と対比される。EQ が用いられるようになったのは、ダニエル・ゴールマン (Daniel

カルは、「自分を変える教室」において多くの成果を上げている。⁽¹⁴⁾しかし、それらには、人間観や世界観などが明確に示されているとはいえない。

また、筆者は、かつて F. カプラらによる「機械的世界観からエコロジカルな世界観へ」⁽¹⁵⁾、L. R. ブラウンによる「経済と地球」についてのコペルニクスの転回の必要性、および、P. シュリバスタバによる「人間」「自然」「自然に対する人間の関係」における「伝統的価値観から環境主義的価値観価値観への転換」⁽¹⁶⁾などについてみてきた。そこには「世界観」についての主張はあっても、「人間観」に対する明確なパラダイム転換は示されず、ましてや人間が世界との関係の中で生きていく「人生観」について論じられてはこなかった。これまで心理学をはじめとする筆者が知る限りの文献の中で、高橋佳子氏は最も説得力ある人間観・世界観・人生観について、同時に、自我の原理と魂の原理⁽¹⁷⁾によって、それらがどのように違うかについても示して⁽¹⁸⁾

Goleman) の著書 (同著, 土屋京子訳『EQ~こころの知能指数』講談社, 1996年) が刊行されて以来である。その後, 同著, 梅津祐良訳『ビジネス EQ』東洋経済新報社, 2000年なども刊行された。

(14) McGonigal, K. (2012) *The Willpower Instinct*, Penguin Random House Company (ケリー・マクゴニカル著, 神崎朗子訳『スタンフォードの自分を変える教室』大和書房, 2012年); McGonigal, K. (2012) *The Willpower Instinct (Illustrated Guide)*, Penguin Random House Company (ケリー・マクゴニカル監修, 神崎朗子制作協力『図解でわかるスタンフォードの自分を変える教室』大和書房, 2014年)。

(15) Capra, F. (1994) *The Turning Point*, John Brockman Ins. (フリッチョフ・カプラ著, 吉福伸逸, 田中三彦, 上野圭一, 菅靖彦訳『新ターニング・ポイント』工作舎, 1995年); Callenbach, E., Capra, F. & Marburg, S. (1990) *The Elmwood Guide to Eco-Auditing and Ecologically Conscious Management*, The Elmwood Institute (E. カレンバック, F. カプラ, S. マーバーグ著, 靄田栄作訳『エコロジカル・マネジメント』ダイヤモンド社, 1992年) など参照。

(16) Brown, L. R., *op. cit.* (訳書) 参照。

(17) Shrivastava, P., "The greening of business", in Smith, D. (ed.) (1993), *Business and the Environment: Implications of the New Environmentalism*, Paul Chapman Publishing, London, pp. 27-39; Shrivastava, P. (1996) *Greening Business*, Thomson Executive Press など参照。

(18) 中丸寛信『地球環境と企業革新』千倉書房, 2002年, 第11章参照。

(19) 魂の原理とは, 宇宙全体を貫く法則——不滅, 循環, つながり——とひとつに

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

⁽²⁰⁾
いる。それについて続けてみていきたい。

(1) 「自我の原理」と「魂の原理」

図表1は「自我の原理」と「魂の原理」について示したものである。私たちは、自覚しようとする無自覚であろうと、これら2つの原理のどちらかを選んでおり、それぞれの原理をベースとした基本的なものの見方、考え方に従って生きている。

図表1 「自我の原理」と「魂の原理」

	自我の原理	魂の原理
人間観	肉体が本質 「死んだら終わり」	魂が本質 「永遠の生命」
世界観	出来事・出会いは偶然の連鎖	出来事・出会いには必然の意味がある
人生観	人生は「快・満足」の追求の場所 「試練には意味がない」	人生は魂深化の場所 「試練は呼びかけ」

出所：高橋佳子『永遠の生命』三宝出版、1996年、89頁など参照。

まず、自我の原理は肉体を基にしており、その人間観は、「肉体が本質、『死んだら終わり』」である。その結果「今さえよければいい」「人生一度きりだから、生きているうちに楽しまなくては」という刹那主義にもなってしまう。今日の趨勢ともいえるその時、その場の快を求めてしまう傾向は、そ

響き合う原理である（高橋佳子『永遠の生命』三宝出版、1996年、75頁）。また、魂とは、私たちの中心にあり続けているものであり、それに触れることによって初めてそこにあったことがわかるものである（同著『魂主義という生き方』2014年、三宝出版、17頁）。「本当の自分らしさ。自分を自分たらしめているもの。自分になくしてはならない中心。志や願い。人生の中で追求してきた目的や理想。それらのすべてを結びつけるのが魂であり、物質以上の人生を支え、牽引するもの」（同上書、87頁）でもある。また、「魂」とは、男女の差、生まれ育ち、身体能力、知的能力、持ち物、家柄などの条件に左右されず、それらのすべてを取り除いたとき最後に残るものであり、そのため魂としてすべての人はかけがえのない存在であり、すべての人は平等である。

(20) 高橋佳子『永遠の生命』87～97頁など参照。

の現れの1つであろう。

次に、世界観は「出来事・出会いは偶然の連鎖」が基になっている。自分の心と出来事とは関係がない。自分の気持ちと世界の問題は何の関係もない。すべての出来事は偶然の産物である。さらに問題は精神とは関係なく生じているものであり、その解決のためには、その問題に関連するシステムなどの現実を変えるしかない。そのような認識を無自覚にしてしまう傾向である。

その結果、人生観は「人生は『快・満足』の追求の場所」にならざるを得ない。人間が「死んだら終わり」であるので生きているうちが花となり、人生は楽しいことやスポットライトや手応えなどの快・満足の感覚を追求する場所となる。そして病気や失敗、悲しみ、苦しみ、挫折などの「試練には意味がない」となる。逆に健康や成功、喜び、楽しみなどには「意味がある」となる。

それらの見方、考え方が無自覚に快感原則を生きる前提となっているといえよう。

それに対して、魂の原理の人間観は「魂が本質、『永遠の生命』」である。人間は不滅・循環・つながりという内なる永遠を抱いており、宇宙に孤立している存在ではない。「私たちは、一度きりの人生を生きながら、同時に、その人生を超える時をも生きている。誰もが、幾度となく人生という経験を重ねて成長してゆく魂である」⁽²¹⁾。

そして世界観は、「出来事・出会いには必然の意味がある」となる。世界と私たちは切り離されたものでなく、つながった一個の全体である。また、私たちの日々の出来事・出会いは無意味に起こるものではなく、そこには必然の意味がある。

その結果、人生観は「人生は魂深化の場所」であり、「試練は呼びかけ」

(21) 高橋佳子『新しい力』三宝出版、2001年、48頁。なお、河合隼雄『宗教と科学の接点』岩波書店、1986年の中では、自我や「たましい」について記されている。

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

と捉えることになる。すなわち、人間は魂を成長させるために生まれてきたのであり、試練は私たちが自我の原理から魂の原理へと生きることを求める世界からの「呼びかけ」となる。

それでは続いて、それぞれの人間観、世界観、人生観に基づいた実際の生き方はどのようになるのかについてみてみよう。

(2) 「自我の原理」に基づく生き方——外界に依存・快苦に翻弄

自我の原理に基づいた生き方では、肉体がすべて、手応えがすべて、五感でわかる世界がすべてという感覚を抱いて、この世で自己実現しようとし、外界に依存せざるをえないことになる。

手応え、満足は、外の反応、外の世界、外の評価といったように外との関係の中で生じてくる。外界に依存することは、外の世界に振り回されるということである。そして、事態に次から次へと追いかかけられ、外の世界の流れのままに生きなければならないことになる。事態に一喜一憂し、翻弄されていくほかない。

そして、快苦の刺激に単純に反応することも、自我の原理に基づく生き方の重要な特徴である。順調な時には満足し、有頂天になり、もっとできるに違いないと欲望が膨らみ無理な拡大をしていく。やがて混乱し、繁栄も滅亡の道へとつながりかねない。

不調の場合には、嫌悪し、落ち込み、試練の圧力に抗しきれない場合には逃げ出してしまう。また、その屈辱感を世間に対して向け、自分をそこまで追い詰めたものとして逆恨みし、今に見ていると見返したい衝動に駆られ状況を逆転しようとすることもある。

いずれにせよ、外界の刺激に、ただ反応し、翻弄されてしまうことになる。

(3) 「魂の原理」に基づく生き方——内界に中心軸・快苦を超えた意味の次元を拓く

魂の原理は、内界の願いや意志に行動の中心軸を置いている。それだけ、自らの内側に対するリアリティが強いということである。自我の原理の場合が常に外界にアクセルとハンドルを握られていたのに対して、魂の原理の場合は自分自身がアクセルとハンドルを握っている。そこで魂の原理に基づいた生き方は、私たちの内界にある意志や願いに中心軸を置き、事態に追われることなく、事態を追いかける生き方を現わす。

また「出来事、出会いには必然の意味がある」という世界観に基づいて、失敗しても、成功しても、それにはどんな意味があるのか、どのようにこの事態、出来事と向き合い、一步を踏み出していけばよいのかと、立ち止まってよく考える。可能な限り事態を読み、現実を直視し、それにどう関わられるかを熟考し追いかける生き方を選ぶようになる。たとえば、立場を得ようが得まいが、それを1つの条件として受けとめ、今どんな働きをすることが呼びかけられているかと考え、自律的に人生と向き合う。

他とのつながり、そして循環の法則が前提となっているため、順調なときには、多くの方に支えられた恩恵への感謝、全体への還元を行う。また、ゆとりのない状況では出来なかった問題に対して、勇気を出して取り組んでゆく。どうしてもやらなければならないことがあるなら、それに挑んで開拓していく。

試練に対してもまず、受容し再生の希望を持つ。すべては成長の機会と考える。そこから新たな、事態を切り拓く智慧が湧出し、改善への手がかりを得ることができる。本当に痛みは呼びかけであり、必ずとるべき最善の道が1つはあるということを忘れない生き方である。

以上のように、自我の原理と魂の原理では、人生の感じ方も生き方もまっ

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

たく違ってくる。そして、魂の原理に従って人生を歩んだとき、そこには、新しい開けが訪れてくるのである。私たちの中には常にこの2つの原理がせめぎ合い主導権を握ろうとしている。私たちは自らがそのいずれに基づいて生きようとするのか、その意志を確かにしていかなければならない。

同時に、自我の原理から魂の原理への転換は、様々な分野でなされていく必要がある。そのための試みはすでに経営、医療、教育をはじめとする様々な分野でなされており、具体的な実践の報告も見られる。それは心の深奥からの喜びに満ちた報告である。またそれは、個人の内なる深化と外の問題解決を同時に達成するものであることをも示している。⁽²²⁾

Ⅲ 「魂主義という生き方」：5つの「自分革命の挑戦」

自我の原理から魂の原理へと生き方を転換していくために、高橋佳子氏は「魂の学」の理論とその実証例が見られる著作『魂主義という生き方』を世に問うている。そのプロローグには、「本書は、『どうあらんとするか』の問いを発する魂を中心に置いて、私たちの周囲のあらゆることを見直すことへとあなたを誘います。その見直しは、必然的に、『これまでの生き方』から『新たな生き方』への『自分革命』を促すことになります。

これから私たちは、『魂主義』の生き方を身につけるための5つの『自分革命』へ向かいます。あなたは、その5つの自分革命に挑戦することを通じて、これまで踏み出したことのない新しい生き方を始めることができます」と記されている。そこでここでは、その著作に依拠しながら、「5つの自分革命」についてみていきたい。⁽²³⁾

(22) トータルライフ総合事務局『創世潮流』No. 1, No. 2, No. 3, No. 4, 2001年10月, 2002年4月, 2002年11月, 2003年8月；高橋佳子『1億総自己ベストの時代』三宝出版, 2013年；同著『魂主義という生き方』など参照。また、高橋氏の著作には具体的な実践例が数多く掲載されている。

(23) 高橋佳子『魂主義という生き方』の中から、その一部を紹介していく。

(1) 第1の自分革命「人生に見えない次元をプラスする」——内外エネルギー交流の発見

多くの人は、心で思っていることに、それほどの関心も払わなければ、それほど力があるとも思ってこなかったのではないか。心は、目には見えず、手にもつかめない。曖昧模糊として、何かもやもやとした実体のないもの——。それよりも、お金や人脈、情報、運用可能な資産の方が、人生に大きな影響力を持つことは間違いがない。

しかし、それこそ、私たちが第1に打破しなければならない先入観である。「魂主義」という生き方は、まさにそれとは対極にある。

① 内外エネルギー交流が世界をつくる

新たな生き方を始める最初の一步は、「心と現実がつながっている」ことを知ることである。それを知識として知るのではなく、事実として経験として知ること。それが、その人の生き方を大きく変えてゆく決定的な一步になる。

私たちの「心(内)」と「現実(外)」は、コインの裏表のように分かちがたく結びついている。そのつながりは私たちが考える以上に密接、強固で、相互に多大な影響を与えている。高橋氏はそれを「内外エネルギー交流」と呼んでいる。私たちは毎瞬間、意識しようとしまいと、心と現実、内界と外界の交流を絶えることなく続けている。心にある想いは必ず現実に反映し、外なる現実にはエネルギーを伴って心に影響を与える。それは、いかなるときも厳粛に透徹して貫かれている法則である。⁽²⁴⁾

(24) 「心」と「現実」が分かちがたく結びついているとのとらえ方は、岩田龍子氏によって記された経営の編成原理と制度の関係と相通じるものがあるといえよう(岩田龍子『日本の経営の編成原理』文眞堂、1977年、1～19頁参照)。

Allen, James (1902) *AS A MAN THINKETH* (ジェームズ・アレン著、坂本貢一訳『「原因」と「結果」の法則』サンマーク出版、2003年)；Allen, James (1907) *THE PASE OF PROSPERITY* (ジェームズ・アレン著、坂本貢一訳『「原因」と

たとえば、職場のことを考えてみる。その場にいる人たちの心が互いにバラバラで、皆が自分のことだけを考えていたら、当然ミスや摩擦が多くなり、仕事の質が落ちて業績にプラスにはならない。そしてその現実がさらにそこにいる人々の心に影響して、悪循環を生み出していく。逆に、メンバーがビジョンや目的を共有して心を1つにし、互いを助け合う気持ちを持っているなら、そこには、創造的な現実が現れ、その現実が今度は、メンバーの結束をより強めていく。⁽²⁵⁾ 私たちは、絶え間なく一瞬一瞬の「内外エネルギー交流」によって生きなければならない。

② 魂を意識して生きる

人間は永遠の生命を抱く「魂」——。それが魂主義の原点である。

人は誰も、それぞれの人生に願いと使命を抱いて生まれてくる。それを果たそうと幾度も人生を経験し、智慧と力を蓄えてきたのである。

その魂の次元を自分自身が持っていると感じとめること。そこから新しい生き方が見えてくる。また、「魂—心—現実」というつながりをいつも念頭に置いて、出来事や出会いに向き合うだけで大きな違いが生まれてくる。そ

「結果」の法則②：『幸福への道』サンマーク出版、2004年；Allen, James (1909) *ABOVE LIFES TURMOIL* (ジェームズ・アレン著、坂本貢一訳『「原因」と「結果」の法則③：『困難を超えて』サンマーク出版、2004年；Allen, James, *THE LIFE TRUMPHANT* (ジェームズ・アレン著、坂本貢一訳『「原因」と「結果」の法則④：『輝かしい人生へ』サンマーク出版、2004年)は、いまなお着実に売れ続けている驚異的なロングセラーと言われているが、その中では心と現実の関係を分かりやすく具体的に記されており、その内容は人間が永遠の生命であることを前提に記されている。

さらに、「人の意識で水の結晶が変わる」ことを水の結晶写真集として示したものに、江本勝『水からの伝言』波動教育社、1999年；同著『水からの伝言 Vol. 2』波動教育社、2001年；同著『水からの伝言 Vol. 3』波動教育社、2006年がある。それらも、心が現実が大きく影響することを示している。

(25) 坂本光司『日本でいちばん大切にしたい会社』あさ出版、2008年；同著『日本でいちばん大切にしたい会社2』あさ出版、2010年；同著『日本でいちばん大切にしたい会社3』あさ出版、2011年；古森重隆『魂の経営』東洋経済新報社、2013年など数多くの企業事例がある。

のつながりを高橋氏は「魂の因果律」と呼び、私たちの「魂」「心」「現実」が、相互に因果の関係で結ばれていることを示している。⁽²⁶⁾まず、目の前の「現実」は、常に私たち自身の「心」を原因とする結果として現れている。そして「心」は、その奥にある「魂」を原因とする結果として現れている。同時に、それとは逆に、「現実」は常に私たちの「心」の状態を生み出し、さらに、「心」は「魂」に影響しているものでもある。この「魂—心—現実」という捉え方によって、私たちは、直面する様々な問題や試練を、自分自身と強く結びつけて受けとめるようになる。

(2) 第2の自分革命『『マルかバツか』を超える』——「カオス」の導入

① カオスという次元を加えて考えてみる

もし「快感原則」に従うだけなら、私たちは、「人生の意味」を喪失してしまうことになる。「人生の意味」は、「快苦」を超えたところにあるからである。

ものごとには、単純にはどちらとも決められない、定まっていない部分がある。高橋氏は、それを「カオス」と呼び、「カオスとは混沌——。光闇、利害、美醜、価値の有無が生じる以前の状態です。それは、光にも闇にも、プラスにもマイナスにもなるものです。私たちが2つに分けてきた、成功と失敗、勝ち負け、損得、価値の有無、いずれにもなり得る可能性⁽²⁷⁾です」と記している。

多くのものごとは、カオスの状態にある。第2の自分革命は、このカオスという次元を加える生き方である。すると、ものごとの見え方が激変する。

② 意味の地層——すべての出来事には必然がある

私たちの前にある現実、地層のように何層にも重なる意味を抱いている

(26) 「魂の因果律」の図(高橋佳子『魂主義という生き方』89頁)を参照。

(27) 同上書、104～105頁。

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

——。その「意味の地層」を掘り進んでゆくとき、すべての出会いと出来事に、私たちが受けとめるべき「必然」があることがわかる。⁽²⁸⁾

ものごとを、浅い「印象」で見ているなら——良い悪い、損か得か、価値があるかないか——表面的な意味しか受けとれず、ものごとの「表皮」しか捉えることができない。この「印象」には、先入観や常識が含まれる。快苦に翻弄される「印象」の心には、マルかバツかとしか捉えられない。

私たちが「印象」を超えて「本心」で受けとめることができるなら、そこにはものごとの「本体」が見えてくる。⁽²⁹⁾

(3) 第3の自分革命「『青写真』(ヴィジョン)を描いて生きる」——内在する魂の力

① 青写真の感覚を持って——最善の道を引き寄せる

「すべてに青写真がある」と考えるところから出発する。これが第3の自分革命である。それは、あらゆる場合に、求めるべき解答があり、どんな事態にも最善の道が必ずあるということの意味している。青写真の感覚は、誤った道にとらわれずに最善の道を引き寄せる力になる。

「青写真」は、ヴィジョンや願い・目的と言い換えることができる。「どうあらんとするか」——何を願い、何をめざし、どんな人間として生きたいのかを示すものである。⁽³⁰⁾

(28) 「意味の地層」については、それを図示したもの（同上書、115頁）を参照するとわかりやすい。

(29) 本心とは、建前や本音の奥にある、魂の次元からやってくる本当の気持ち、本当の願いである。その想いに触れると、私たちは、世界を覆うヴェールがはがれるような体験をし、新しい世界が生まれてくる。「本体」とは、思い込みに曇らされないありのままの事実であり、私たちの本当の想い、願いと1つになった現実である（同上書、116頁）。

(30) 「魂の学」には「人間の使命」の図がある。これは、私たちの「どうあらんとするか」という問いに対する1つのあり方を示している。私たちがめざすべき「青写真」がここにある（同上書、157～159頁参照）。

そのあり方を心に描くことは、決定的に重要なことである。自らの「青写真」を心に置いて、それを軸として生きることは、私たちに想像を超える力をもたらししてくれるからである。私たち1人ひとり⁽³¹⁾は、世界に対して決して無力ではない。「青写真」=ヴィジョンを抱いた1人ひとりの力こそ、これからの世界を支える原動力になるのである。

② いかなる時代・社会の青写真を抱くのか

私たちが描く青写真=ヴィジョンは、1つの出会いから、目の前の出来事の結果、仕事の成果、そして1人ひとりの人生、さらには地域社会、国家、国際社会の未来にまで直結している。経済や社会のあり方に対しても、新たな「青写真」を掲げるときが来ているのではないか。確かなことは、唯物主義、刹那主義、利己主義⁽³²⁾を超えた志だけが新たな青写真を描くことができるということである。

(31) とくに長期的に持続し成功している企業の特徴に関心がある人が読むべきであるとし、「卓越した企業を築くにあたっては、誰でも主役になれる」ことなどを記している文献に、Collins, J. and Porras, J., *Built To Last* (ジェームズ・コリンズ、ジェリー・ポラス著、山岡洋一訳『ビジョナリー・カンパニー：時代を超える生存の法則』日経BP出版センター、1995年)；Collins, J., *Good To Great* (ジェームズ・コリンズ、ジェリー・I・ポラス著、山岡洋一訳『ビジョナリー・カンパニー②：飛躍の法則』日経BP出版センター、2001年)；Collins, J., *How The Mighty Fall* (ジム・コリンズ著、山岡洋一訳『ビジョナリー・カンパニー③：衰退の五段階』日経BP社、2010年)；Collins, J. and Hansen M., *Great By Choice* (ジム・コリンズ、モートン・ハンセン著、牧野洋訳『ビジョナリー・カンパニー④：自分の意志で偉大になる』日経BP社、2012年)がある。

(32) ここで「唯物主義」とは「見えるものしか信じない」という姿勢であり、形あるもの数字や成果だけに重きを置く精神性のこと。「刹那主義」とは過去や将来など後先のことを考えず、「今さえよければ後はどうなっても構わない」という姿勢のことであり、一時的な快樂だけを求める生き方のこと。「利己主義」とは自分の利益だけに関心があり、「自分さえよければほかのことはどうでもよい」という姿勢であり、「エゴイズム」と同義である(高橋佳子『魂主義という生き方』80～84頁参照)。

(4) 第4の自分革命「『果報側』から『因縁側』へ」——人生の主導権を取り戻す

① 選択できることこそ「主導権」の証

「主導権」とは、「ものごとの中心になって動かす力」である。誰であろうと、どんな立場であろうと、ものごとの中心に立ってその責任を引き受け、よりよい未来をつくろうとする力が「主導権」である。私たちが主体的にものごとに向き合うとき、そこには必ず「主導権」が生まれる。そして「選択」ができることこそ、「主導権」の証である。⁽³³⁾

② 決定的選択はここにある——因縁側か果報側か

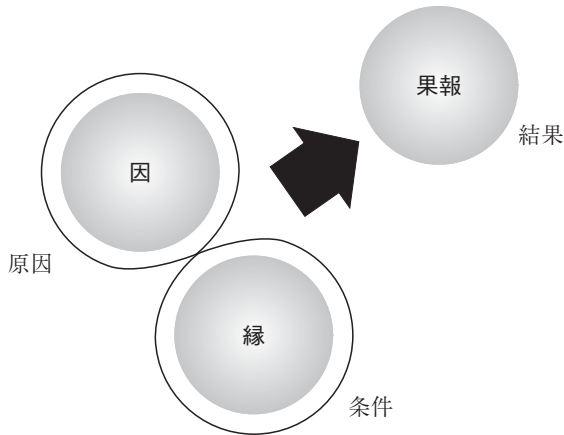
高橋氏によると、「因縁側」「果報側」という言葉は、仏教の「因縁果報」から来ている。ここで「因縁果報」とは、原因と結果の法則である。あらゆる現象は、その元となる原因（因）が条件（縁）と結びついた結果（果報）として立ち現れているとみる（図表2）。つまり、この世界における一切の生成と消滅を司るエネルギーの流れを、3つの極で捉えるものである。

高橋氏によると、この世界に因縁果報の法則から外れる現象は何1つない。

(33) 「主導権」についての詳細は、高橋佳子『新しい力』197～241頁参照。なお、心と現実のどちらがより根本的なものであるかを問えば、心になるであろう。なぜなら、心で思うことが現実になるのであり、心の中にないものは現実にはならないからである。それと同様な主張は、たとえば矢内原忠雄氏にみられる。氏によれば「環境は行為の条件にして主体ではない。行為の主体は意思である。同一の環境に置かる者が悉く同一の行為をなすものではない。特定の行為をなすべきや否やは意思の決するところである。道徳的不自由の根本原因は環境の不備にあらずして、意思そのものの本質に存する病弊にある」（同著『マルクス主義とキリスト教』岩波書店、1982年、71頁）。

大塚久雄氏も同様に、経済的貧困と精神的貧困あるいは心の貧しさは、互いに原因となったり結果となったりして、密接に絡み合っている。経済的貧困の奥底には、意識されているとしないとにかかわらず、精神的貧困が横たわっており、後者を解決しておかない限り前者を解決するための次のステップが出てこない。その意味で、心の貧しさがより根本的であると指摘している（同著『生活の貧しさと心の貧しさ』みすず書房、1978年、28～39頁、62～64頁参照）。

図表2 因縁果報



出所：高橋佳子『魂主義という生き方』192頁。

森羅万象、あらゆる現実、この原因（因）と条件（縁）から生まれた結果（果報）である。たとえば、チューリップの球根（因）は、大地や大気的環境（縁）と結びついて花を咲かせる（果報）。同じように、大自然の無数の生命が成長していくことも、人間の魂（因）が三つの「ち」という条件（縁）を引き受けて、人生という結果（果報）を織りなしていくことも、すべてこの因縁果報の法則に則っている。

また、私たちが「因縁側」に立つとは、ものごとの生成のエネルギーの主体者となることである。自らものごとの原因となり、条件を整えて事態を変化させ、新たな現実を生み出す。感覚的に言えば、それは何かを「してさしあげる」側である。

一方、「果報側」に立つとは、結果だけを得ようとする生き方である。自らがものごとの原因をつくることなく、条件を整えることもない。他の誰かが原因をつくり、条件を整えて、ものごとを生み出そうとするその流れに乗せてもらう。感覚的に言えば、それは何かを「してもらおう」側である。高橋

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

氏によれば、「因縁側」に立つか、それとも「果報側」に立つか——。その選択によって、決定的な違いが生まれる。また、「因縁側」に立つ人々こそ「人間の使命」⁽³⁴⁾を果たそうとする人々である。

③ 「果報側」から「因縁側」へ——「3つの幸せ」の成長段階

ここでの「3つの幸せ」とは、「もらう幸せ」「できる幸せ」「あげる幸せ」である。生まれ落ちた赤子の私たちは、誰もが「してもらう」側の人間として生き始める。

そこから私たちは、少しずつ自分で「できること」を増やしていく。今日の社会では、「できること」をどこまで引き上げることができるかが重要と見なされ、人に対する評価もそこに重心がある。

しかし私たちは、さらに成長していくことができる。他の多くの人々や自分が守りたい場のために尽くし、支えることを喜びとする「あげる幸せ」を⁽³⁵⁾求めるようになる。

(34) 「人間の使命」については、それを図示したもの（高橋佳子『魂主義という生き方』158頁；同著『1億総自己ベストの時代』三宝出版、2013年、157頁）を参照のこと。

(35) 「3つの幸せ」は、マズローのいう低次の欲求から自己実現へ、さらに自己超越へと人間として成長していく生き方と相通じるものであるといえよう。マズローの低次の欲求は「もらう幸せ」、自己実現は「できる幸せ」、自己超越は「あげる幸せ」に当てはまると思われる。

またここでの「あげる幸せ」は、稲盛和夫氏の生き方としての「利他の心」と相通じるとされる（とくに同著『生き方』サンマーク出版、2004年；同著『稲盛和夫の実学』日本経済新聞社、2000年；同著『稲盛和夫の哲学』PHP研究所、2003年；同著『心を高める、経営を伸ばす』PHP研究所、2004年；同著『高収益企業のつくり方』日本経済新聞社、2005年；同著『働き方』三笠書房、2009年；同著『京セラフィロソフィー』サンマーク出版、2014年など参照）。同氏は、「利他の心」で生きることによって地球環境問題も解決できると主張している（同編『地球文明の危機——倫理編』東洋経済新報社、2010年；同編『地球文明の危機——環境編』東洋経済新報社、2010年参照）。さらに同氏による「JAL再生」の歩みは、原英次郎『心は変えられる——稲盛和夫流・意識改革』ダイヤモンド社、2013年にまとめられている。

「もらう幸せ」は「果報側」の段階である。「できる幸せ」を超えて「あげる幸せ」を求める段階こそ、「因縁側」に立つということである。

(5) 第5の自分革命「すべてを条件として」——魂に軸足を置いて生きる

① 誰もが切なる「願い」を抱いて生まれてきた

魂主義から見た人生の大前提——それは、誰もが生まれたくてこの世界に生まれてきたという事実である。自分で気づいていなくても、願いとかけ離れた生き方をしている、誰もが切なる願いを抱いて、この人生に生まれてきた1人ひとりである。

魂に刻まれた「願い」と「後悔」——。それは、私たちに人生という道のりを歩ませる原動力と言えるものである。願いから後悔へ、後悔から願いへ——。この願いと後悔のダイナミズムが、人生という魂の挑戦の根底には、いつも脈打っている。

たとえどんな厳しい条件を背負っても、人間は、その中から人生を創造できる。なぜなら、生まれ育ちも三つの「ち」も人生の結論ではなく、すべては条件だからである。その条件をどう引き受けるかによって、私たちの人生は深化していくのである。

高橋氏によると、人生には3つの段階がある。

第1段階は、「こうだったから、こうなってしまった人生」。負の「人生の条件」に吞まれ、翻弄されて生きざるを得ない段階である。しかし、そこから、その負の「人生の条件」に抵抗し、それをバネに逆転するとき、第2段階「こうだったのに、こうなれた人生」を歩むことができる。さらにそこから、その負の「人生の条件」だったからこそ、深い人間性を引き出し、応えるべきミッションを見出すことができる第3段階「こうだったからこそ、こうなれた人生」を生きることができる。

そして、何よりも重要なのは、この3段階を生きる力は、最初から私たち

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

自身の内に宿されているということである。

② 強く、深く、悠々と生きる

高橋氏によると、私たちが一度、自分を魂として受けとめたなら、「すべてを条件として」という生き方を手離すことはできなくなる。人生に訪れるいかなる苦難や試練をも受けとめて、これほどたくましく生きる生き方はほかにはないからである。

私たちは何にもまして、強くなる。快苦に揺れ動き、試練を前にして投げやりになったり、落ち込んだりする心に、困難に立ち向かう意志とエネルギーが生まれてくる。

そして、人生に訪れる出会いと出来事を愛しみ、これまでとは比較にならないほど深く生きることができるようになる。

無自覚に出来事にマルかバツをつけることから、それを超えて事実を見つめ、関わる人々の心を想い、さらにそこに託された呼びかけを受けとめることもできるようになる。

さらに、目先の利益をあくせくと追うことから解放され、魂の呼吸を取り戻し、真の自由を得て、悠々と生きることができるようになる。どんなときも、めざすべきもの、求めるべきものを見失うことがないからである。

強く、深く、悠々と生きる——。それは、「すべてを条件として」生きる私たちの揺るがぬ姿勢となるのである。

これまで「魂主義という生き方」を身につけるための「5つの自分革命」について概観してきた。

高橋氏によると、第1の自分革命「人生に見えない次元をプラスする」を起こすことによって、私たちの内側、心の中にある想念と、私たちの外側に現れる現実の両者の間を行き来するエネルギーの流れが見えるようになる。あの出来事には、私のこの想いが反映している。あの人が私に反感を抱いて

いるのは、私の中にあるこのエネルギーが伝播した結果である。そういうことが、実感として理解できるようになる。

第2の自分革命『『マルかバツか』を超える』を起こすことによって、出来事の中に世界が発しているメッセージを聴くことができるようになる。日々体験する出来事は、自分に「こうしなさい」「ああしなさい」と呼びかけている。この感覚を身につけると、日常は一変する。世界という自らの人生の教師を手に入れることになるのである。

この第2の革命を経た時点で、すでに仕事も人生も、大きな変貌を遂げていることを実感することができる。

第3の自分革命『『青写真』(ヴィジョン)を描いて生きる』は、そこから進んで、人生の設計図を見せてくれる。自分の人生がどこへ向かっているのか。自分の人生の行き着く先に何があるのか——。この第3の革命を経ることによって、自分の人生の未来に関わる予言を授かることになる。

第4の自分革命『『果報側』から『因縁側』へ』は、個人の人生の責任を生きる段階から、世界のためにはたらく、人々のために貢献する段階へと飛躍させる。

第5の自分革命「すべてを条件として」は、訪れる出会いや出来事、問題や試練のすべてを、魂として受けとめる実感をもたらすことになる。この転換は、これまでの4つの自分革命の総合とも言える。私たちはここで、何よりも人生の願いと使命を果たそうとする魂の感覚と、あらゆることをそのための条件として受けとめる未曾有の受容力を手にすることになる。

以上のように、5つの自分革命を手がかりにして始まる「魂主義という生き方」は、様々な問題に対して「どうするか」という問いと同時に「どうあらんとするか」——自分はどこに向かってゆくのか、何をめざすのか、何を願って生きてゆくのか。どんな人間として生きたいのか——を自らに問う生き方である。それは、決して、窮屈な道徳心から発せられるものではない。

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

心底からの決然とした意志、本心のありかを問うものである。そして同時に、外ではなく、内なる自分に向かうものであり、自分自身の中心を問う、問いかけ⁽³⁶⁾でもある。またそれは、私たち1人ひとりの内にある可能性を本当に信じ、その可能性を引き出す道である。それは、人生を変え、家族や職場を変え、そればかりかもっと大きなミッション（使命）にも応えてゆく力になる。

IV まとめにかえて

これまで快感原則から新しい原理・原則を生きていくために、高橋氏のTL人間学（「魂の学」）に依拠しながら「自我の原理」と「魂の原理」、またそれぞれの原理における人間観・世界観・人生観や生き方などをみてきた。そこでは、自我の原理と魂の原理では人生の感じ方も生き方もまったく違ってくこと、魂の原理に従って人生を歩んだとき新しい開けが訪れてくこと、さらに自我の原理から魂の原理への転換は様々な分野でなされていく必要があることなどを指摘した。

さらに、自我の原理から魂の原理へと生き方を転換していくために、私たち1人ひとりの日常生活での生き方について、分かりやすく説かれている「魂主義という生き方」を身につけるための「5つの自分革命」について概観してきた。それらは、これからの私たち1人ひとりの日常生活における生き方の指針になるに違いない。

それにしても、自我の原理から魂の原理へと転換して生きること、また「5つの自分革命」を生きることは決して容易なことではない。私たちは、日々出会う出来事や事態に対して「感じ、受けとめ、考え、行為」、すなわち受信・発信を繰り返しながら生きている。その前提として、誰もが背負わざるを得ない宿命としての三つの「ち」があり、それが自動回路になってい

(36) 高橋佳子『魂主義という生き方』20頁。

⁽³⁷⁾
 るからである。

魂の原理を生きるためには、まず自分自身の受信・発信を振り返り、いかに無自覚に三つの「ち」のままに自我の原理を生きてきたかを自覚していくことから始めなければならない（自己探求）。そして、その自分があるがままに受け入れること（自己受納）、さらに、自らの内にも外にもあるその古い回路の強烈な流れと闘い、それを止め、新しく生き直さなければならない（自己変革）。そしてやがて、自分自身を超えていくこと（自己超越）が求められる⁽³⁸⁾。ここで紹介した「5つの自分革命」は、そのための大切な指針・手がかりを与えてくれるといえよう。

筆者は、これまで地球環境問題をはじめ様々な問題が押し寄せている今日、それらを解決するための鍵について検討し、その鍵が多くの論者によって「内なるエネルギーの開発」にあるとされていること、しかし、現時点ではそのための明確な方法が示されているとはいえないことを指摘した。また今日こそ、私たち1人ひとりの欲望の抑制・昇華へと導き、快感原則を超えるための理論、および、「内なるエネルギーの開発のための方法」が求められていることも記した。さらに、これまでの心理学をはじめとする筆者が知る限りの文献では、高橋氏によって提示されている TL 人間学（「魂の学」）に、非常に精緻な理論や、実践的方法（メソッド）があったことも記した。⁽³⁹⁾そこ

(37) 中丸寛信『地球温暖化と環境マネジメント』千倉書房、2009年、241～246頁；同稿「地球環境問題の根本的原因についての一考察——快感原則を中心として」など参照。

(38) 高橋佳子『サイレント・コーリング』三宝出版、190頁参照。筆者自身も自分を見つめ知っていく中で、当たり前のように苦痛を斥け快適に過ごすことを求めながら自我の原理を生きてきたこと、順調なときには満足し不調なときには落ち込みながら一喜一憂を繰り返してきたこと、現実の事態や人に対してマルかバツかを判断しながら生きてきたこと、など自らの愚かさを自覚してきた。同時に、それを超えることに挑戦し続けることが大切であることを実感している。

(39) 中丸寛信「地球環境問題解決のための鍵——内なるエネルギーの開発」『甲南

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

で最後に、高橋氏が体系づけた TL 人間学（「魂の学」）の可能性についてふれておきたい。

それは第 1 に、TL 人間学には人間や世界についてのこれまでの哲学的テーマに明確に答える理論があることである。ここではそのごく一部しか紹介できなかったが、その理論は「人間とは何か」「人間は何のために生きているのか」「世界と人間の関係はいかなるものか」「人間にとっての本来的な生き方とはいかなるものか」といった哲学的テーマに解答を与えるものである。⁽⁴⁰⁾

第 2 に、TL 人間学には心理学的テーマにも答える理論があるといえよう。マズローは自己実現的人間の特徴について数多くの説明をしているが、それにしても「自己実現というのは、定義するのが難しい。自己実現のあなたは？という質問に答えるのが、どれだけ難しいか。また、真実のあなたは何があるのか、という質問についても同様である。まさに正直であるということは、結局、こういったことすべてに関しては、十分でない」⁽⁴¹⁾とのべ、彼が究明しようとしたテーマ——人間はどれだけ成長できるのか、また何になることができるのか——に答えることが極めて困難であることを表明している。TL 人間学には、そのようなマズローの疑問に答える内容がある。

第 3 に、それに基づいて、TL 人間学にはマズローなどの心理学者がめざす 1 人ひとりの潜在的可能性を開いていく方法（メソッド）がわかりやすく、日常生活の中で誰もが、いつでも、どこでも着実に取り組める形で提示されている。その意味で、これまでの心理学を深化・発展させたものであるといえる。

マズローは自己実現に向かうための行動や手順として次の 8 項目を挙げて

経営研究』第 52 巻第 1 号、2011 年 7 月、89～114 頁。

(40) ここで記した哲学的テーマは筆者が大学時代以来抱えてきた研究テーマであり、それに関連して修士論文「経営学の基礎理論——その哲学的・経済学的考察」をまとめたが、その後も筆者はそれらを重要な研究テーマとしてきた。

(41) Maslow, A. H. (1971) *The Farther Reaches of Human Nature*, p. 43 (訳書、54 頁)。

(42)
いる。

- ①自己意識や自己知覚を少なくし、無欲に生きること。
- ②人生をつぎからつぎへと選択する過程と考え、恐れのかわりに成長への選択をすること。
- ③衝動の声（自己の内部の声）に耳を傾けながら行動し、反応すること。
- ④迷ったときには、嘘をつくよりもむしろ正直になって責任をもつこと。
- ⑤引込み思案になるより、勇敢になること。
- ⑥自分のやりたいことを上手にやりとげるために働くこと。
- ⑦幻想をこわし、誤った考え方を除去し、自分の不得手なものを知り、自分の才能の中にあるものを知ること。
- ⑧自分自身に、自分を開くこと。

以上の8項目を要約すれば、「抑圧をつき崩し、自己を知り、衝動の声を聞き、素晴らしい本性を解放し、知識や洞察や真理に到達すること——これらのものこそ求められるものである⁽⁴³⁾」となる。

マズローの自己実現の方法は、大切な生き方の指針を与えているが、その方法を知るだけで、自己実現に向かって自分を見つめ生きるとは難しいと思われる。それらは抽象的であり、そこには一瞬一瞬動く心を的確に、実感的につかむための道標が見られないからである。⁽⁴⁴⁾

また、マズローの心理学研究で著名な上田吉一氏によると、健康な人格は自己受容、すなわち、理想の自己と現実の自己との間に大きなずれがなく、

(42) *Ibid.*, pp. 45-49 (訳書, 56~61頁).

(43) *Ibid.*, p. 52 (訳書, 66~67頁).

(44) F. ハーズバーグの理論 (Herzberg, F. (1966) *Work and the Nature of Man* (訳書); Herzberg, F. (1967) *The Managerial Choice*, Dow Jones-Irwin (F. ハーズバーグ著, 北野利信訳『能率と人間性』東洋経済新報社, 1978年) 参照) にも、マズローと同様に限界がある。そのことを、中丸寛信『地球環境と企業革新』254~256頁の中で記している。

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

現実の自己を肯定的に受け入れることができると同時に、自己の現実をありのままに認識することができる自己客観化の特性をもつ。しかし、上田氏は、自己客観化が最も理解の困難な領域であることを指摘している。⁽⁴⁵⁾

一方、高橋氏が提示しているメソッドのひとつに「ソウル・コンパス」（魂羅針盤）といわれるものがある。それは、一瞬一瞬電光石火のスピードで動く私たちの日々の心の動きをとらえることができる道標となるものであり、マズローの方法の限界、また上田氏の指摘にある「自己客観化の困難さ」を克服するものである。それは、縦軸を快と苦、横軸を暴流と衰退とし、4つのゾーンに明示したものである。4つのゾーンは、「怒り」や「不満」に象徴される「苦・暴流（被害者）」の傾向、「怠惰」や人に対する盲目的な「依存心」に象徴される「快・衰退（幸福者）」の傾向、「恐怖」や「否定的想念」に象徴される「苦・衰退（卑下者）」の傾向、そして「欲望」や人に対する「支配」に象徴される「快・暴流（自信家）」の傾向として分けられている。⁽⁴⁶⁾それを手がかりに、日々の心の動きをとらえ、修正していくことが可能になる。その「ソウル・コンパス」は、これまで誰も示し得なかったものであり、自我の原理から魂の原理へと自分革命を生きるために不可欠なものである。さらに、「ウイズダム」と名づけられたものもある。それは直面している問題を解決し、新たな現実を生み出してゆく解決と創造のメソッド（実践法）である。⁽⁴⁷⁾TL人間学には、その他有用な力を発揮する様々な方法がみられる。

第4に、TL人間学の理論と方法に基づく実践によって、問題の解決や新

(45) 上田吉一『【新装版】精神的に健康な人間』川島書店、1993年、256～262頁参照。

(46) 「ソウル・コンパス」の図、またその詳細な説明は高橋佳子『新しい力』94～194頁；同著『「私が変わります」宣言』三宝出版、2002年、80～121頁；高橋佳子『運命の方程式を解く本』三宝出版、2007年、105～107頁など参照。

(47) 高橋佳子『いま一番解決したいこと』三宝出版、2004年、222～224頁など参照。

たな創造へと導かれた事例が数多く生まれている。実際に TL 人間学（「魂の学」）を学び、実践することによって、内からのエネルギーが開発され、①心と身体が元気になってきた、②試練の受けとめ方が変わってきた、③困難に強くなった、④毎日が生き生きと楽しくなってきた、⑤人間関係が良くなってきた（苦手な人と仲良くなってきた）、⑥新しい関わりや出会いに恵まれるようになった、⑦新たな人生の兆しが現れてきた、⑧新しい現実を開く力が与えられてきた、といった人の事例が数多くみられる。それは子どもたちから大人まで、年齢・性別を問わない⁽⁴⁸⁾。そのような事例は、TL 人間学の理論と方法の正しさを実証しているといえよう。

マズローは「人類は原理的にいつ誰でも善良で健康な人になりうるが故に希望を持つことができる。しかしまた、実際には非常にわずかな人だけが善良な人になっているので悲観せざるをえないのである」⁽⁴⁹⁾と記しているが、それら数多くの事例は私たちに希望を与えるものであるといえよう。

第5に、上記のように TL 人間学には、1人ひとりの内にある可能性を引き出し、現実の問題解決や新たな創造を同時に果たしていく方法があり、私たちはどのような問題に対してもその方法を活用することによって、未来に希望を抱きながら生きていくことができるようになるに違いない。高橋氏は新著作『未来は変えられる』⁽⁵⁰⁾の中で、未来を変えるための事態のとらえ方や考え方・生き方を提示すると同時に、極めて厳しい現実を好転へと転換した4人の方の事例を紹介している。それらは、「思いがけない事故に巻き込ま

(48) 高橋佳子氏の数多くの著作参照。とくに子どもたちについては、同著『FUTURE——未来を創る心のふしぎ』三宝出版、1996年；同著『チャレンジ！——君は未来を開く冒険者』三宝出版、1997年；同著『TRY！——三つの知恵の秘密』三宝出版、2000年など参照。

(49) Maslow, A. H. (1962) *Toward a Psychology of Being*, p. 163 (訳書, 218頁).

(50) 高橋佳子『未来は変えられる！——試練に強くなる「カオス」発想術』三宝出版、2015年。

地球環境問題の根本的解決に向けての一考察（中丸寛信）

れ、大けがをしてしまった！」（1章）、「誰ともうまくゆかずに孤独。しかも重病になり、会社も休職……」（2章）、「気の遠くなるような問題と試練。まったく道が見えない！」（3章）、「転職したものの、想定外の壁が……。手も足も出ず、絶望」（4章）という状況から、それぞれの方の判断と行動によって、あり得ないような未来が開かれた実例である。それらの実例は、私たち1人ひとりが未来を変えていくために、新しく生きていくチャンスとそのための確かな生き方があることを示している。

これまでみてきたように高橋氏は、「5つの自分革命」の道を示しているが、大切なことはそれを具体的に実践してみることであるとのべている。

TL人間学の中で示されている方法は、その実践の有効な手がかりを与えてくれるに違いない。それによって、日々具体的に私たち1人ひとりの内に眠る可能性を引き出す挑戦に向かっていきたいものである。そして、そのような私たちの歩みが積み重ねられ、「魂主義という生き方」が大きな流れになるとき、様々な問題のみならず、誰もが加害者であり被害者である地球環境問題という大きな問題も解決されていくに違いない。⁽⁵¹⁾

(51) デヴィッド・スズキらは、自然科学の視点から「私たちは地球である」ことなどをわかりやすく示しているが、「魂主義という生き方」によってその感覚が引き出されていくであろう（Suzuki, D., Vanderlinden, K. (2010) *You are the Earth*, Greystone Books（デヴィッド・スズキ、キャシー・ヴァンダーリンゲン著、辻信一・小形恵訳『きみは地球だ』大月書店、2007年）；Suzuki, D. (2010) *The Sacred Balance*, Greystone Books（デヴィッド・スズキ著、柴田譲治訳『生命の聖なるバランス——地球と人間の新しい絆のために』日本教文社、2003年）。なお、問題解決のためには、多くのすぐれた研究者やNPOなどによって提唱されてきたネットワークやシステム、仕組みなどを構築していくことも必要不可欠である。